

アの地にむなしく消えてしまった。

わたくしの人生

兵庫県 森田 純

私は、兵庫県加東郡福田村（現在は社町）沢部の純農村の地に、大正の末期（大正十五年三月）、祖母と両親、そして男四人、女三人の七人兄弟の長男として生まれました。

幼少のころより農耕に従事させられ、農業に対する疑問をもって仕事の手伝いをしていました。父からよく聞かされた言葉に「学問と健康」は人間生活の鍵だ、だから努力せよということでありました。

昭和十四年三月福田尋常高等小学校高等科二年を卒業し、大望の兵庫県立農学校に同年入学し、一学期繰上げて昭和十六年十二月に同校を卒業しました。

当時は太平洋戦争も激化し、戦況も余りよくない状況でした。また、食糧増産の時代でもあったわけです。

国内情勢から考え、私の上級への進学も断念せざるをえませんでした。そして、父のはからいで実業家をめざしました。

東洋製缶株式会社の姉妹会社が満州国大連（旧名）にあり、その社名は満州製缶株式会社といって空缶製造の会社でした。

この会社に昭和十七年一月入社いたしました。缶詰製品を作るには空缶技術、知識を修得せねばということとで約六カ月の予定で空缶専門に研究をしました。

同年八月に吉林省公主嶺市（旧名）に缶詰工場を建設する予定でその地に転勤し、工場建設と軍需産業としてスイトコーンの缶詰の研究を命じられ、満州平野に適したスイトコーンの栽培を満系に委託し、爛熟期に収穫して、カッターで削り、汁をしぼって食塩を加えるだけですばらしい軍需食糧が生産できる研究に成功し、工場が早く完成する日を待っていました。

昭和十八年三月公主嶺市で徴兵検査があり、一日で検査が終わり、甲種合格が国防婦人会の前で決定いたしました。

昭和十九年四月満州製缶株式会社を休職にして入隊準備をしました。

その当時の満州といえば日系、満系、朝鮮系すべて一体で、私たちが入隊するということが豚肉一頭分を満系の人々が持参し、野外で焼肉と高粱酒で大送別会を開いてくれました。私が独身でだれも身の回りの世話をしてくれる者がいないことを知っていますので、親がわりに千人針の腹巻き、国旗の寄せ書き、お守りなど心温まるもてなしをしました。兵役が終わったらまた公主嶺に帰って来るよう約束して昭和十九年五月、広い公主嶺駅にいっぱい日本人、満州人、朝鮮人と見送りに来てくれました。歓呼の声に送られて、公主嶺駅を出発いたしました。

入隊は牡丹江歩兵二六五連隊第一大隊第一中隊第一小隊の第二班に入隊しました。入隊後は内務班長（加藤伍長）より細部にわたってこれからの生活についての注意があり、第一小隊は六班編成で、明確ではありませんが班は召集兵と朝鮮兵と現役兵の混成で班の人数は四十名内外でした。

一日の日課は、起床が五時三十分ごろで、起床と同時に寢床を整備して朝の点呼、体操、銃剣術の練習等約一時間、その後、朝食をとり、野外演習、特に匍匐前進の練習と肉攻演習といってタコツボがあり、そこに隠れていてチビとか破甲爆雷で戦車攻撃の演習が主でした。また、夜演習が三日に一回ぐらいの調子であり、特に班ごとに敵の陣地をいかなる方法で攻めるかの訓練なり作戦の演習でした。

約一カ月ほど二六五連隊で訓練を受け、ある日牡丹江の二六五連隊の陣地へ移動しました。その地は山地で、すでに塹壕があり歩哨小屋もありました。壕の方向、歩哨小屋の位置などはすべて北方方向をむいていて、なぜか理解に苦しむこともありました。

例えば夜間歩哨に立っていると小隊長が巡回して来て、この方向に光とか音が聞こえれば、すぐ電話連絡するよう指示がありました。兵隊たちの間ではソ連軍の侵入があるかもしれないうわさでした。

演習と夜間の歩哨といった毎日が続き、その合間に幹部候補生の特別演習があり、苦しい日々でした。

陣地で約半月ほどして班長より呼び出しがあり、出頭すると、君は甲種幹部候補生に合格しているから、今からすぐ別の二号棟に移動するよう命じられ、その二号棟に行くと三十二名ほどの合格者が集まっていた。小隊長より今からは幹部候補生の教育をするから覚悟しておけという訓示があり、すぐに内務生活に入りました。今までとはまったく違った生活、訓練でした。

いく日かたつてソ連参戦の報を聞き、これは大変な事になった、自分の班とか小隊から犠牲者を出さぬようどうすればよいのか全員で話し合いました。よい結果は得られませんでしたが。ただ生命だけは自分で守ることを約束した。そして二日、三日、と日が過ぎても敵の姿は見られませんでした。

そして、昭和二十年八月十五日、大隊長命令により全員練兵場に集合せよ、重大ニュースを伝達するという場内放送があった。ほとんどの者がソ連軍が侵攻して来たのだといながら集合した。集まってみれば大隊長は馬に乗り抜刀して、小さい台の上にラジオがあ

り、大隊長が大声で、いまからよく聞け、重大な放送があるから、とどなった。

そして、停戦の詔勅、玉音放送であった。ほとんどの者がウソだといい、関東軍は健在だと口々にぐちをこぼした。小隊長が、ほんとだ、原子爆弾によって日本内地はメチャメチャだと言った。そして、次の指示があるまで兵舎内で待機せよ、自分の私物はまとめていつでも出発できる用意をせよとあり、解散したのでした。

翌日朝、全員武装して練兵場に集合の命令により集まり、本日ソ連兵により武装を解除するからこの場で待機するよう伝達がありました。待つこと約二時間、ソ連の将校五〜六名が大隊の前にジープで乗りつけてきた。水筒と雑糞は自分で持ち、他の物は全部前に置くよう指示があった。全員そのとおりに行動した。そして次に、雑糞の中を全部自分の前に出して並べよとのことであった。全員そのとおりにした。ソ連将校が一点一点検し、「よし」で、また元に整理して武装解除は終わり、兵舎にもどりました。約一週間、別に何

もせず次の指示を待ちました。ソ連軍参戦についても噂程度でした。

八月末だと思うのですが、全員牡丹江駅に集合ということで陣地を出発、約十キロほど行軍で、飯盒に食料を詰め込み、ただ黙々と歩きました。一般道路に出ますと、開拓団員がもてるだけの荷物を持ち、子どもを背に暑さと飢えと疲労で、「兵隊さん助けてください」と足をつかみ泣かれたとき、何と表現してよいか、今でもその姿が眼前に浮かびます。「あとから助けに來ますから待っていてください」と返事するより他にありませんでした。また、歩いている道路の両側には開拓団の人々の死体が隙間せましとならんでいる。悪臭とハエとウジ虫、そして足などは腫れあがり、顔には少しの土がかけられていましたが、この惨めな姿は、生涯忘れることはできません。このような状態が牡丹江駅近くまで続きました。これが敗戦国の哀れな姿だとしじみと感じ、二度と軍隊はいらない、戦争などすべきでないことを行軍しながら語り合いました。

今思えば、この時に親が子供を中国人に託し日本に

帰国した、その当時の子供が残留孤児として帰国しているのだと思う。

牡丹江駅に集結し、小隊ごとの幕舎生活が始まった。駅には貨物列車の有蓋車が列をなして整理され、全部二段ベッドになっていた。ソ連兵が周辺をうろろして我々の様子を監視していた。そしてヤポンスキー東京ダモイと口々に教えてくれた。また小隊長も皆にウラジオストックかナホトカ経由でわれわれは内地に帰国すると伝達してくれた。全員信じてその日を待った。九月初旬だと思う、大隊全員集合して、大隊長から、本日この列車でウラジオストック経由で内地に帰国する、みなさんは体に気をつけて帰国してくださいと最後に訓示して乗車した。

乗車して五日たっても六日たっても列車は走り続けた。途中二―三時間の停車があったものの、いくら待っても海も見えず、港らしき風景も見あたらない。その内にと思いつながら、内地の生活を空想し、語り合っていた。そのとき全員下車の指示があり、各小隊ごとに整列した。その時の大隊長は泣き声で「われわれはだ

まされた、ここはチタだ」との説明であった。実に残念でたまらなかつた。空を飛べるなら逃げたい気持ちであつた。チタで各車両の責任者集合があり、話し合つた結果、どこへ行くかわからない、いまからどんなことが起きるかわからないから、われわれは結束した行動をとるよう申し合わせた。

チタを出発し、途中食糧補給などをしながら、五日目についたのはタイセットという駅であつた。

タイセット駅で下車の指示があり、荷物を持って下車した。このとき、自分の班員に話したことは、絶対に陣地構築とか軍に関する仕事は拒否するよう申し合わせた。

そして、小隊ごとに分かれ、幕舎に入った。舎内は薪を燃やすストーブがあり、天井は五センチほどの厚さの霜がはつており、床板は氷のように凍つた板張りである。冷凍室のような幕舎であつた。各人に配布された寝具は毛布三枚だけで、とても耐えることのできる寝具でなかつた。また食料は黒パンと高粱のおかゆの中に小魚が混り、塩味のおかゆであつた。

タイセットの作業はほとんど毎日山に出かけて薪づくりが日課でした。十月の薪づくりは困難でした。薪自体が水を含む、それが凍っているので、薪としては価値はありませんでした。そこで立ち枯れの木を捜すのに困りました。だが、これはよく燃え暖をとるのに最適でした。こういった毎日が約半月ほど続き、一体われわれはどうなるのか不安でした。

十一月の中ごろだつたと思うのですが、移動命令が出ました。行く先は不明で、十台の貨物自動車に分乗して、氷の川を通路として三日ほど方向もわからぬまま進みました。そして到着したのは製材工場であつた。大きな丸のこ、帯のこが動き製材の音がしていた。この地で暮らすことになるんだと言われ、それぞれ作業(仕事)の内容が伝えられて小隊が解かれて作業内容によって小隊編成がされた。作業内容は、鉄道敷設、製材工場要員、軽便鉄道従事者と大きくわけて三部門に分けられ、私は軽便鉄道の機関車従事となつた。運転士、罐たき、連結士と三人一組で三台の機関車を扱うことになり、二交代で十八名で組織され、それに整

備士が五名加わり軽便鉄道が動いた。

機関車の燃料は薪で蒸気を発生させていた。エンジンフターで川の水を補助タンクに入れ、薪を機関車の後部に満載し、原木を山から製材工場まで運搬する仕事でした。一番困るのは、冬季マイナス三〇度〜四〇度の日などは鉄は凍り、機関車の動輪が凍り、よくすべって脱線したとき、周りは雪また吹雪、手は凍り人間自体の動きが鈍り、ノルマに追いまわされた時は生きた気持ちではありませんでした。作業内容は原木運搬の繰り返しが毎日で、日曜日の休暇は最高の一日でした。

私たちのラーゲルはブラーツクという地名で製材とタイセットから鉄道敷設が主な仕事でした。工場内は帯ノコと丸ノコがあり、原木（カラマツ）を、ほとんど枕木をつくって各方面に搬出していました。このラーゲルには二千人ほどの旧関東軍兵が生活し、一般の作業は鉄道敷設で、土盛りとレール敷設で、ターチカ（今の一輪車で木製です。車輪は鉄製で、タラップを作り、その上を押す方法です）で土を運搬して、一日のノルマが一立方メートルが自分たちの生活で、衣、

食、住でゼロというノルマでした。だから一日にどうしても一立方メートルの土を土盛りせねばカンチャイ（終わり）ではありませんでした。カマンジールの点検をうけて一日の作業が終わります。

だが、夏季はほとんど八時間以内に終わりゆっくりと作業ができたのですが、冬季は凍土となり、朝から掘る場所で火を焚き凍土を溶かして運び、また溶かして運ぶの連続で、一日ではノルマが終わらなく寒さと空腹と疲労と一日の日照時間の短いのと、労働時間が十時間以上も長くなり、やっと寝たかと思えば起床で仕事という毎日が続き、一般作業隊の人々はまず食うということに神経が集中して、内地でのポタモチ、巻寿し、すきやき、米のめし、その他食う話だけでした。また、ポタモチが夢にまで出てきた人も数多くいました。

このような労働を強制される毎日が続き、次々と倒れる人々が出ました。栄養失調の患者が多く、骨と皮で見る姿ではありません。それでも軽い人は仕事に出なくてはいけませんでした。軍医の診察をうけてもラ

ポート、ラポートといわれて休むこともできず、ふらふらしながら土盛り作業をしたのです。時に倒れノルマがあがらず宮倉に入れられた人もいました。

また、神経痛が出て、足、腰が痛み、とても作業ができる状態のない人でも、軍医はロスキーに神経痛という病名、病気はない、おまえはうそを言って仕事をサボろうとしていると認めてくれず、仕事をしている人が多数でした。ソ連側に交渉しても通じませんでした。回想すればこんなことが多くあり、実に悲しい思いをみせつけられました。

兵舎内でストーブを囲み内地の話をして寝た人が次の朝には死んでいた。いくら起こしても起きず、さわってみて冷たくなっていました。栄養失調患者の特有の死でした。そのとき、ソ連の人々は人情も義理もない無知な人間だ、いや、人間ロボットだと感じ、友人に、草を食え、食える物はすべて食えと話し合い、この栄養失調から逃れたい一心に励ましあい、いつかは日本に帰れるから頑張れ頑張れの連続でした。

また、時々ですが、無蓋車に家畜用の大根とかじゃ

が芋などが駅の構内に入るときがあります。冬であれば雪が積もっているため雪の中へ大根、じゃが芋をほかし（放っておく）、作業を終えて帰って来る人々にひろうよう連絡をとったりして、この栄養失調を克服したのです。幸いに私は機関庫があり釣り針を作ることができなかったので、休日などは針づくりをして川に釣りに行き、大きい魚を釣り、舎内で料理をして一般の作業隊の人々に与えたこともありましたが、焼け石に水のようなものでした。

次に伐採作業を一般の人々はしていました。二人用のこぎりで直径一メートル一・五メートルある大木を倒すのですが、冬は雪の中で木全体が凍っているために倒すと枝が五十メートル周囲に飛び散り、その枝に当たって傷を負う人も多く出ました。また、シュエバを着、防寒帽をつけ、フェルトの長靴をはいているため、敏捷な行動ができず、大木の下敷きになる人もいました。とにかく生きることだけしか考えない生活が続いたわけです。

次に食事ですが、約半年間は高粱のおかゆといつか、

ぞうすい小魚入りでした。その次はトウモロコシの粉末のぞうすい、次は粟と大豆煮物で、昭和二十三年ころは食料は燕麦のぞうすいで、米の飯は一粒も食べませんでした。こういったぞうすいに黒パン一切れ（縦七センチ・横十センチ・高さ十二センチぐらい）と岩塩小さじ一パイと砂糖小さじ一杯ぐらいが一般の人々の食事でした。その他は自分で工夫するしかありません。例えばアカザ、ノビル、春から夏にかけての雑草の新芽を摘み、岩塩で煮るより方法はありませんでした。また糖分などほとんどなく、正月とメーデーには燕麦でつくったようかんが炊事からあがるくらいで、他にはシラカバの木の芽がでるころ、木にゴム液をとるように傷をつけ、その液水が少し甘味を感じる程度の水を飲むぐらいで、長く続きませんでした。なぜかという、シラカバの芽が出てしまえば甘味のある液水は出ません。

概略の食生活の様子です。飢えと戦いながら一日一日生き延びるのが精いっぱいでした。食える物はすべて食ったように思っています。いま考えればどんな苦

しい生活でも生きることに関しては自信をもっています。

次に、衣服などはほとんど支給されませんでした。洗濯も余りできず、水洗いぐらいでした。それと、衣服のシラミに困り、月に一回ぐらいの滅菌があり、そこに出して高温でシラミ退治をしていたのですが、二三日ぐらいしかもちません。二千人余りの人々の肌着ですので、簡単にはいきませんでした。靴は、軍隊の革靴は破れ、その代用に靴底は木製で、上は布ばりの靴でした。すぐに破れたり、底がこわれて使用できませんでした。冬はフェルトの長靴で、これは少し助かりました。

宿舎内の生活は二段ベッドで毛布四〜五枚程度で昼間の服装で寝ていました。特に冬は足に毛布の破れを巻きつけ、零下五〇度ぐらいの夜は防寒帽を着て寝ていました。当直がいて、一夜じゅうストーブを焚き続けて暖をとっていましたが、とうてい気温には勝てませんでした。衣服を補修しようと思っても針も糸も布もなく、針は針金で作り、糸はマータイの麻糸をほぐ

してよりをかけて作り、布は作業場でひろい補修をしていたのです。それも日曜日しかできませんでした。

日曜日は点検にソ連将校（カマンジール）が巡回見回りに来て、われわれの生活なり健康状況を調べていました。点検に来る将校は、立派な人格の将校だったことがいまでも記憶に残っています。時にはカタコトの日本語で「東京ダモイ、ハラショ」とよく聞きます。私もハラショと返答したことをおぼえています。ソ連兵としては人情味のある人でした。こういった会話ができるようになったのは昭和二十三年ごろだと思いません。

昭和二十三年ごろよりデモクラシーの教育（民主教育）が月に一回程度各宿舍ごとに開かれました。その当時、私は機関庫の班長をしていました。宿長よりこのデモクラシーの教育を受けなければ内地に帰れないということを知り、班員に、どんな事があっても受けてハラショ・ハラショ、会が終わるようにせよ。休むと残留になるといわれていた。このデモクラシー教育は帰る時まで続きました。内容は記憶していま

そ。帰るための手段として受けただけでした。

ラーゲル内での生活は衣食住の生活を全員が助け合い共に強く生きる生活をしてきたと思います。だが生死をさまよう生活、特に過酷な労働（ノルマ）と食生活の貧困には隊員全員が困りはてました。日本人の要求はソ連人に通じません。ただ頑張って生きるしか道はありませんでした。いま回想すれば、生きていることが不思議に思えるわけです。

ただ全員に同じ死ぬなら日本に帰って死にたい、カマンジールになぐられようが、営倉に入れられようが、絶対に抵抗せず、内地に帰ろうという、ほんとうに精神力で生き続けたと思います。召集兵の人は高齢者もいましたが、特に高齢者には精神力で生きようの一言でした。

そして、昭和二十四年八月の初めでした。全員東京ダモイだとカマンジールから聞かされ、またうそかと思いい本気にはしませんでした。いまままでに何回も東京ダモイと聞かされ実現したことはなかったから、今回も噂だと思いましたが、自分の日用品を全部もって収

容所前の広場に集合し、収容所長から列車が到着しているから小隊ごとに有蓋車に乗るよう指示があり、弁当を飯盒につめ乗車しました。

ブラーツクから北に向かわず南の方向に出発したため今回は本物だなど直感し、機関庫の全員が喜びに湧きました。私たちの大隊の列車は昼夜走り続け、停車した所はイルクーツクだと記憶しています。だが、半信半疑で乗車し、またどこかに転送されるのではないかと疑問をもっていました。半日ほど停車してその間に食料の補給をして再び出発し、次に着いた駅はチタでした。チタでも半日ほど停車し、食料の補給をしましたが、このときはずい分量が多かったので不思議に思い、成り行きにまかせました。

そして、ナホトカに着くまで二、四の駅で停車し食料の補給をしてナホトカに着いたわけです。これがナホトカだとわかったのは下車して収容所に入り、まず最初に持ち物検査を受けました（税関検査）。全裸になり、体をしらべ、次に持ち物すべて調べられました。ここで一番悲しい思い出が残っています。それは白

分の所属していた収容所で栄養失調とか木の下敷きとなって死亡した人々の氏名と死亡年月日とその人の日本の住所を書いたメモ帳を没収されてしまい、まったくわからなくなってしまいました。内地の親、兄弟に連絡したい気持ちで書き綴った紙片ですが、無くして悔しくて悔しくて仕方ありません。いまでもあるならほしいと思っています。

このナホトカ集結地で五日ほど滞在し、その間は別に作業らしい仕事もなく、薪割りとか薪取りに山に行く程度でした。ただ心には不安もあり、もしかしたら別の地に移されるのではないかと心配がありました。

昭和二十四年八月二十五日、出勤命令が出ました。一列に整列して港の岸壁を歩いていくと日の丸の国旗をあげた船が眼前に見え、これでほんとうに日本に帰れると感じながら黙々と歩き、棧橋を上ると甲板の両側に白衣の看護婦さんが「長らくご苦労さまでした」と言って鉛筆を一本ずついただきました。そのとき、日本人女性の美しさは今でも脳裏にやきついて忘れていません。船内に案内され、各小隊ごとに所定の席に

つき、ほとんどの者が心は内地に帰り、巻寿司、ポタモチ、すきやきなどの話でもちきりでした。

船内での夕食の合図があり、当番が飯あげに行き、持ち帰った食缶から味噌汁の香りが四年ぶりに懐かしく、全員大喜びで食事を待ちました。待望の食事です。食器に山盛りの真っ白い米の飯にみんな感無量でした。なんととっても味噌汁の味はいつまでも忘れません。朝食、昼食、夕食と三度の食事が、仕事もせず、ごろごろの船内生活で食事が苦痛となってきました。米の飯は胃につかえてくるわけです。船内は平和に楽しい日々でした。乗船して五日目だったと思うのですが、甲板に上がると、はるか前方に薄く山が見えて来ました。「おーい、山が見えるぞ……」の呼び声にみんな甲板に駆け上がり、待ちに待った日本に帰ったという実感をえました。

隊長から最後の別れのあいさつが船内に流れ、舞鶴港に入港し、下船の命令を待ちました。

その当時、舞鶴港には真っ赤に錆びた船が船首を上
に沈んでいたのを今も記憶しています。

下船命令が出て、タッグボートに分乗して舞鶴の収容所へ向かいました。

八月三十日、ついに日本に帰ったんだという実感を
得ました。

収容所に、入る順に衣類などが支給されました。夕食には、たしか尾頭付きの魚の煮つけがついていたと思う。とても懐かしい夕食でした。翌日は米軍のMPの点検があり、一番印象に残ったのはラーゲルの名称を言っただけで、何をしていたか、どの位置か、すべてわかっていました。取り調べが一人一人行われ、四日間滞在、さあ今日は夢に見た郷里へと向かう日であった。この四日間に一度舞鶴市内に外出が許されて見物に出た。入国した時に千円の現金をもらい、その金で駄菓子屋でセンベイ一袋を買おうと思い、友人と「これ一袋いくら」とおばあさんに聞くと「百円」と言われた。びっくりして、買わずにその場を去った。なるほど物価が高いということを新聞（抑留中）で見たがほんとうだなと認識を新たにしました。

生活を共にしてきた友と別れ、舞鶴駅に着くと父が

出迎えに来ていた。懐かしの父と出会い指定列車に乗り谷川駅に向かった。谷川駅で乗りかえて加古川線に乗り、青野ヶ原駅で下車した。下車してみれば、私の村（沢部）あげての出迎えに感激と感謝の念でただ涙が流れるだけであった。

親戚一同の歓迎と同級生一同の同窓会での歓迎会などを受け、生きていてよかったと思った。ただソ連の凍土の中で冷酷な生活に耐えきれず内地の生活を夢みながら死んでいった友に、言葉で表現することができない気持ちでいっぱいです。

帰国後当分の間、一日二食の生活を続けました。私の郷里では私が一番帰国はおそかったそうです。帰国後どう生活するか、満州での研究物、参考資料すべてをまとめ自分の荷物を故郷に送ったのですが、その荷物は着いていませんでした。実に残念で途方に暮れてしまいました。

自分の人生を回想し、終戦という思いもせぬ衝撃と抑留と、帰国すれば満州での研究物と資金を基に小さくてもよい食品加工業と計画を自分なりに考えていま

したが、一瞬にして希望がなくなり悔しい毎日でした。こんなことを思うようになりました。なんのために満州に行き、青春もほとんどなく一にも二にも国のためにと聞かされ、真剣に受け止め、国策にそって努力してきたのに、まったくゼロの人生となったわけです。父は帰れただけでも有り難いと思えという、そう思えばそうだと思うのだが。

こういった会話が福田小学校時代の担任でした井上真次先生の耳に聞こえ、ある日呼び出しがあり、会いに行きました。

井上先生が、「おまえ教師をせよ」といきなり言われ、「自信がない」と言うと「説明するから」といって二時間ほど説明を受け、少しは望みがもてました。両親に相談すると言って帰宅し、両親に話すと大賛成でした。すっかりその気になって受験をいたしました。それが昭和二十五年二月だったと記憶しています。視学官が、君はソ連から引揚げてきたんだな、ソ連教育を受けただろうと質問があり、「はい、教育は受けました」と答えますと、「やっぱりなあ……」とうなず

いていました。強制的に抑留者は全員受けたわけですから、そうできないのでしたかなしですわ、と返答しました。もう帰ってよろしいといわれて帰宅したのですが、後味が悪く、運がないと諦めていました。

昭和二十五年三月三十日、視学官より呼び出しがあり、昭和二十五年四月一日より福田村立福田中学校に勤務を命ずる辞令を受け取り、私の人生が一度に光りはじめました。

井上真次先生に再び出合い、教師生活の指導を受け、一途、免許状の修得に努力することを誓い、教師生活が始まりました。目標は生徒に親に信頼される教師となる、第二は師範学校を卒業した教師に負けない実力をつけることを自分の肝に命じ努力しました。

教師として早く一人前になりたく助教諭から教諭にと検定試験を受け、五年後に二級普通免許状を取得し、それから三年後に一級普通免許状を取得し、やっと一人前の教師となることができました。人間は誠実に生きることの重要性を感じ、子どもたちもそうであ

てほしいと望み教育に努力してきました。

昭和六十一年三月三十一日付で四十一年間の教師生活を終え、第三の人生にと頑健な姿で取り組んでいます。

学校教育で得た特技、指導法を社会教育に生かす努力をし、郷土の発展を願っています。

郷土を形成しているのは人間(男女)しかないわけです。私が昭和二十年から昭和六十一年までの体験を通して、相手の人々を尊重する人づくりが戦前、戦中、戦後を通して重要であることを私は体験し肉となり血となりました。この経験を郷土の人づくり教育としてこれしかない「同和教育」に取り組んでいます。現在は、七人家族で三人の孫に励まされ、楽しい日々を送っています。

【執筆者の紹介】

森田氏は、大正十五年三月三十一日、兵庫県加東郡社町沢部五七〇番地の一にて出生。

昭和十六年十二月、兵庫県立農学校を卒業

昭和十七年渡満、公主嶺にて缶詰工場の建設に従事

昭和十九年、徴兵検査合格、入隊

昭和二十年九月、入ソ

昭和二十四年八月、復員

昭和二十五年四月、福田中学校へ教員として奉職

昭和六十一年三月、加古川農学校を最後に定年退職

退職後は地元地域社会において社会教育事業に従事。

昭和五十四年、全抑協兵庫県連台会が発足すると同時に加東郡支部の役員として活躍していただいている現在です。

(兵庫県 上月 光男)

私のソ連抑留回顧録

和歌山県 河端 亨 之

私は、那智勝浦町大字庄六一二(旧、下太田村庄)

で、父・河端乙一、母・いさの、の長男として大正十一年六月二十三日誕生しました。私の上に姉が三人お

り、男子出生とあって家族全員に祝福され、特に祖父母には甘やかされて育てられました。弟姉妹と言えば、私の後に生まれた男子五名と外に女子五名の計十一名両親と祖父母との大家族でありまして、父母の苦労は並大抵のことではなかったように推察いたしております。

学校関係については、地元、下太田小学校を卒業、上・下・太田組合立太田実業学校(旧制乙種農業学校)を卒業、日高郡南部町、県立紀南農業学校二年に編入され、昭和十六年十二月二十七日に当校を繰上げ卒業になりました。この年、昭和十六年十二月八日は、大東亜戦争に突入した日であり、当日は紀南農業学校の和歌山六十一連隊長の査閲があったことを思い出します。その後昭和十七年一月四日、和歌山県庁職員に採用され、耕地課勤務となり、次いで昭和十八年九月に日高川沿岸農業水利事業所に転じ、県営事業日高川堰堤(頭首工)として着任した。

昭和十九年一月末日、県職員を現役兵として入隊のため退職しました(当時、県職員は召集の場合は現職